

■あらすじ

それは一発のビンタから始まった。

勘違いから憧れの先輩にキスを迫ってしまった竹原。

彼はその口止めの肩代わりとして、友人を道連れに演劇部の助っ人部員として自主公演に出演することになる。

だが素人である竹原は稽古場で何度も演技を止められてしまうことに悩みを募らせる。

そんな竹原に一つのアドバイスを与える先輩。

そうして迎えた本番。

公演を終えた時、竹原はあの時のアドバイスの意味を身に染みて知ることになる。

■登場人物

竹原真一（たけはらしんいち）男 16歳 演劇部の助っ人部員

星野敬（ほしのけい）女 17歳 演劇部部长

内藤大地（ないとうだいち）16歳 演劇部の助っ人部員

長谷川泉（はせがわいずみ）18歳 演劇部の3年生

中島成美（なかじまなるみ）17歳 演劇部の3年生

部員 1

部員 2

部員 3

SE…パチンというビンタの音

竹原「終わった。完全に……終わりだ」

敬「あなた最低です！今キスしようとしましたよね！」

竹原「いや、それはほら……だって3回目のデートだし」

敬「デート？そんなものした覚えありません」

竹原「え？映画とか遊園地とか……」

敬「一緒に来て欲しいといつもしくく言うからついてきただけです。なんですかその眼、まるで恋人とでも言いたそうな……」

竹原「え？違……」

敬「違います。こんな方だと思ってませんでした。この事は皆さんにお話します」

竹原「ええっ！？それは困る！折角高校デビューをしようつのに……」

敬「高校デビュー……そうですね、じゃあ取引しましょう。もう一度、高校デビューをして下さいませんか」

SE…部活動の喧騒が遠くで聴こえる。

竹原「お願いします。付き合ってください!」

内藤「お前本当しつこいな。こうやってついてきてやってんだろ。にしたって……本当にあの先輩を落とせると思ってワケ?」

竹原「思うよ。毎日図書館で一人でさ、こりゃきつと友達とかいないんだろうなって。だつたら俺なんかでもこう仲良く……」

内藤「ところが蓋を開けたらただ台本を書いてただけだったと」

泉「いた。発声練習始めるよー!!」

竹原「発声?屋上なんかでやるんですか?」

内藤「マジか?超ハズい」

成美「早くしろ!助っ人部員!!」

竹原「俺ら……演劇デビューだな」

内藤「お前のせいだな」

SE…外で雨の降る音。

SE…パチンと手を叩く音。

敬「そこまで」

竹原「え?でも今読み始めた……」

敬「駄目だからそこまで。もう一回」

SE…何度もパチンと言う音が鳴り響く。

内藤「ははは、ボロボロだな」

泉「内藤君は呑み込み早いのにね」

竹原「休憩だよな。飲みもの買ってくる」

SE…自販機でジュースを買う音が3つ

成美「一月経つってのに全然だなチャラ男君」

泉「そもそも台詞覚え悪すぎ。デートマニュアルは完璧に覚えてたんでしょ?」

竹原「なっ、どうしてそれ……」

泉「敬ちゃんから聞きました」

竹原「はい?結局話してるじゃないか」

成美「まあ、これも何かの縁ってことでさ、一つ演劇部の力になってくれよ」

泉「今度の自主公演で新入部員が入らなかったらアウトだからね」

竹原「皆さん3年生ですものね」

成美「あたしらが悪いんだけどさ、2年生

あの子しか入れられなかったし」

泉「助っ人と言わず本入部しちゃえば？」

竹原「嫌ですよ。だって俺なんか……」

SE…耳元でパチンという音。

竹原「うわっ!!」

敬「セーフ。ほら、もう蚊が飛んでました」

泉「もう休憩終わり？じゃあ先戻ってるね」

SE…泉と成美の去る音。

竹原「あ、じゃあ俺も」

敬「助かりました。助っ人引き受けてくれて」竹原「半ば脅迫ですけどね」

敬「やっぱ怒ってます？」

竹原「それは別に……」

SE…耳元でパチンという音

竹原「うわっ!!」

敬「また蚊が……そんなに驚くこと？」

竹原「そうじゃなくて、そのパチンってやつ、軽くトラウマっていうか」

敬「何で？」

竹原「終わった感があるっていうか。ほら、それで俺止められてばっかだし」

敬「そうか……でもこれって……私にとっ

ては多分その逆の音」

竹原「なんですかそれ」

敬「2週間すればきつと分かります。さ、稽古稽古。ほら何してるの」

SE…観客たちの喧騒。

内藤「ほら、何してんだよ真一！」

竹原「その、緊張っていうかさ……」

成美「はははは、ガッチガチだな」

泉「勘弁してね。ウチら3年にとっちゃ最後の舞台なんだから」

部員1「照明準備OKですよ」

部員2「音響もバッチリです」

部員3「先輩、お客さん結構入ってますよ!」

敬「それじゃみんな、気合い入れて行くよ!」

SE…開始ベルの音

竹原M「照明の眩しさのせい?違う、ただただ無我夢中すぎたんだ。自分が今何をどうやって演じているのかなんて全然記憶にない。ただこれだけは覚えてる。この感

覚……なんだよこれ。俺、これ、好きだと思う、きつと。……そんな俺の再び現実に引き戻したのは、やっぱり」

SE…パチンという音

竹原M「終わった。俺……失敗したのか?」

SE…パチンという音が幾つも続く。辺りは拍手に包まれる。

竹原M「これ……終わった……けど違う」

一同「有難うございました!」

SE…さらに大きな拍手が辺りを包む

内藤「ふう。これで助っ人生活も終わりだな」

竹原「俺さ、敬先輩の言うこと分かったかも」

内藤「はい?」

竹原「(パチンと手を打って) 終わりじゃなくてさ……始まりの合図なんだ」

内藤「そうか……そうだな」

SE…大きく手を打つ音

敬「二人とも!片付け手伝って!」

竹原「はい!」

【終】

※ご利用上の注意※

- ・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・Skype などを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)